

戯曲本舗クラブ企画

ドラマリーディング「a(3X=54乗x)」

「(X)にいる」

作・山本祐也

男が一人。椅子に腰掛け一点を見つめている。

話をしよう。

全くもってこの世の中には絶望する。今では直接目にする必要がなく、こうしてディスプレイ越しに様々な情報が手に入るわけだから。

人々が犯す事象のほとんどは、それこそ宗教じみた原罪として扱われる。何をやったのかではなく、どうしてそうしたのか、実行したのかの一边倒になっている。

「思い込む」という事は何よりも「恐ろしい」ことだ。しかも、自分の能力や才能を優れたものと過信している時は、さらに始末が悪い。

逆説的ではあるが、人間は嫌なことを強要されるほどその集団に対する帰属心が強くなる。

普遍的に考えてみれば、嫌なことを強要してくるような集団には誰しも所属したいと思わないはずである、がしかし、実際の人間の心理は往々にして逆である。

このことを説明する前に、人間の心理に関するひとつ重要な事実を記憶に留めてもらいたい。それは、

「すべての人間は自分が有能であると思っているし、そうであると信じたい。」

ということだ。

つまり、すべての人間は自分自身が優れた人間だと信じている。そのため、間違った選択をすることなど無いと思っている。だから、もし何らかの集団に所属することになり、そこで嫌な思いをしてもその事実を認めたくない。なぜなら優秀な自分が間違った選択をするなんてはずがないのだ。自ら選んだ選択肢なのにそこで精神的苦痛を受けるならば、自分は聡明でよい判断ができる素晴らしい人間だという自己概念から矛盾してしまふ。

そんな認知的不協和を解消するために、自分が属する集団が素晴らしいものであると信じはじめ、誇りに思うようになるのだ。これは「甘いレモンの合理化」と呼ばれており、人間は自分が選んだもののポジティブな面を強調し、ネガティブな面を無視する傾向にある。

良く言えばプラス思考な人間、ということになるが、少なくともこういう心理的作用が存在することを知っていないと真実から目を背けてしまうことになるのだ。

なんらかの集団に属するにあたり嫌なことをさせ、その集団に対する愛着心・帰属心を植え付けさせるといふ手法はカルト的宗教集団においてよく使われる手法であるが、身近にも同じパターンは存在する。

例えば企業を例に挙げよう。新入社員に嫌な経験をさせるといふ企業は多い。もちろん様々な理由があつてそれをやらせるのだろうが、実は愛着心・帰属心を意図的に植え付けさせるためにやっているのだ。

なんらかの新参者が辛い体験をすることで、かえつてその集団に強い愛着がわき、一員であることを誇りに思い、熱心に活動するようになる、という事実は社会心理学者による実験でも確かめられていることである。

人が嫌なものから目を背ける心理というのはこんなに単純なものだ。

『士農工商』という言葉を知っているとおもう。中高の学生時代、社会の授業で耳にしたはずだ。念のために日本が封建時代に作った階級社会の制度であると説明しておく。

しかし、かつては『士農工商』のあとに続く言葉があつた。あなたは穢

多という言葉を読めるだろうか。あるいは非人、河原者という言葉を知っているだろうか。最近は「穢多」という言葉すら見受けられないし、非人や河原者という単語の説明も当たり障りのないものでしかない。

しかし、それでは遙か昔の為政者や権力者のご都合で作られた制度から生まれ、そして、いま現在にも日本の社会に残る差別というネガティブな側面に、向き合うことなく「臭いものにフタ」なことになるのではないか。

言葉狩りばかりに躍起になっても、けっして根本的な問題解決へと導かれないはずだ。

ああ、また外野がうるさくなってきた。けたたましい怒鳴り声と扉を乱暴に叩く様は怒りを通り越して呆れるものになってきた。全盛期を過ぎるとこうして年の功という言葉を乱暴に用いて、弱者を牽制する。でもそれはただの思い込みであり、弱者と思う相手のほうが力を持っていることに気づいていない。

錆付けば二度と突き立てられず、掴み損なえば我が身を裂く。そう、誇りとは刃に似ている。

例えば、屠場について例を挙げてみよう。

生きたままの解体は、極稀に気絶させるための家畜銃を当てる箇所が不適切で、気絶した牛と単に体が麻痺して動かない牛の区別はつかず、したがって、気絶することなく吊り下げられ、血を抜かれ、熱湯に浸けられる牛がいる。

家畜を確実に気絶させることができないのは安く大量に殺害するためなど経済的理由がある。電気ショックで家畜を効果的に気絶させるには高い電圧が必要だが、電圧が高すぎても家畜は痙攣で凶暴に暴れ、筋肉に出血を起こし骨を損傷したりして、肉の質を落とすことになる。

また、高い電圧では電極近くの皮膚が焦げ、その結果、脳へ流れる電流の効果を妨げる。電気ショックのほか、一酸化炭素を使って牛の意識を失わせているところもある。ガスにさらされた最初の10-15秒の間、牛はおとなしくなるが、その後、苦しみのあまりもがきはじめ、凶暴に脚で蹴るため、ガス室へ運ぶコンベアーのベルトを損傷することもある。

ここで考えてほしい。これが物を殺すということだ。

屠場は重要なものを生み出す現場だ、と主張してきたのは、生き物を殺すことを忌み嫌う、「殺生戒」や「穢れ観」に呪縛され、その差別と正面から対決していない妥協的な主張だという自省も生まれている。

ものの重要度を区別して、生き物を殺す行為を弁明しようとすれば、野犬を捕らえる仕事をしている人々はどうなるのか、との矛盾に逢着する。殺生戒や穢れ観こそが差別をつくりだしている。この呪縛から解放される方へむかおう、ということだ。

ただこれだけは思う。命を奪っていいのは、命を奪われる覚悟のある奴だけだ。

いつしか人々は生きていくうえで、の原罪というものを忘れ去ろうと、目の前から現実を遠ざけるだけでなく、その罪を誰かに転嫁させて「忌まわしく、あさましい」存在に仕立てると、蔑み抑圧することで自らの贖罪と正当性を認めようとする。

それだけではなく自らに内包する罪悪感をも解き放つカタルシスさえ感じるわけである。

こんな時僕は牙が欲しいと思う。そうすれば、「忌まわしく、あさましい」その存在の首元に牙を突き立てることができるからだ。

動物たちからしてみれば、差別や、ヒエラルキーを作りたがるのが人の業であり、人間の集団は何か排除するものを作って、それをうまく利用して結束することがある気がすると思っっているだろう。

まあいい。これから何が必要で何を取捨選択していくべきなのか、それを……

実際に起きてしまった事象には、なんらかの結論を示さなければならぬ。いつまでも後回しにしてしまえば、それは取り返しがつかなくなってしまう。

これができるのは知恵の力であり、絶対の力の一つだ。これには72通りの名前があるから、何と呼べばいいのか。

この作品は、戯曲創作団体「戯曲本舗」に帰属する作品です。

「戯曲本舗」では、帰属作品に触れた方から「意見・感想を頂き、それを作品の改善・修正に役立っています。」

「この作品を読んだ」「感想、」「意見、」「質問などありましたら、是非、左記までお寄せ下さい。

gikyoku.honpo@yahoo.co.jp(戯曲本舗アドレス)

(尚、頂いた「意見やアイデアを元に修正された作品の著作権は作者に帰属されますので」了承下さい)

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

